

懸命に取り組んで知った数学の魅力、チャンスを生かし研究職に

中村(荻原) 俊子 (城西大学理学部数学科 准教授)

仕事の内容とやりがい

四角い氷はどうして溶けると丸くなるのか、外来生物はどのように生息域を広げるかなど、身の回りには数式を使って記述できる問題がたくさんあります。こうした数理モデルの数学的解析が私の研究テーマです。筋肉の収縮や神経内の物質輸送には分子モーターとよばれるタンパク質が関わっていますが、最近には特に、この生物分子モーターモデルの研究に取り組んでいます。数学は抽象的な概念も多く、論理の厳密性も要求されますが、証明できたときは爽快ですし、国内外の研究者との交流では大いに刺激を受けます。大学では、講義とセミナーを担当しており、学生の成長していく姿を見るのが何よりのやりがいです。年に1、2回、セミナーの教え子達がOBOG会を開き、1期生から現役生まで集まり賑やかに情報交換しています。

進路決定のきっかけ

中学・高校の数学教員だった母の影響もあり、同じ道に進もうと数学科を選択しました。大学3年生のとき、レポート問題を1ヶ月間考え続けたことがあります。証明の長い問題も取り組むうちに、1桁の足し算を暗算する感覚で筋道立て考えることができるようになった初めての経験でした。数学の面白さに惹かれ、大学院修士課程に進学しました。ところが、進学早々畑違いと感じ、大学院修了に必要な修士論文を早く書き上げてしまおうと勉強に集中しました。論文作成を通し、断片的な証明がパズルのようにつながり1つの定理を証明することができ、達成感を味わいました。偶然、この分野で最先端の研究をされている東大の俣野博士がお茶大で講義を持たれており、アドバイスを頂いたのがこの世界に入るきっかけとなりました。

仕事と家庭のバランス

仕事も家庭も中途半端というのが本音で、何を伝えればよいか悩みましたが、裏返せばどちらもやりたいことが一杯あります。数学の研究は時間や場所を選ばないので、家庭との両立には好都合です。小学生の息子がいますが、夜息子が寝た後や息子を学校に送り出した後など、自分のペースに合わせて仕事に取り組めます。忙しい時や行き詰まっている時に息子の笑顔を見ると癒されます。私は子供の頃、母にいつでも数学の質問ができましたが、息子にも同じ環境を作ってあげたいと思います。研究では、旧姓の荻原をペンネーム感覚で名乗っていますが、姓の使い分けは仕事モードと家庭モードの切り替えになって便利です。

進路選択に対してのメッセージ

目標に向かって、一度は全力で挑戦して欲しいと思います。受験勉強や大学での勉強が大変という目先の理由ではなく、大学卒業後、30歳や60歳など、未来の自分を想像して進路を考えて欲しいと思います。「誰にでも人生に何度かチャンスはめぐってくるもので、チャンスを生かせるよう実力をつけておくことが大切。」これは、研究や進路に悩んでいたときにお茶大時代の指導教官の澤島侑子先生から頂いた言葉です。

<中村(荻原) 俊子 (なかむら (おぎわら) としこ) プロフィール>

北海道札幌北高校 → 東京都立日比谷高校(父の転勤のため転校) → お茶の水女子大学理学部数学科 (推薦入試で合格) → お茶の水女子大学大学院理学研究科数学専攻(修士課程) → 東京大学大学院数理学研究科(博士課程) <日本学術振興会特別研究員(DC2)> <博士号(数理学)取得> → 東京大学大学院数理学研究科研究生 <結婚> → 北海道大学電子科学研究所(工学部講師(VBL研究員)) → 城西大学理学部数学科講師<出産> → 現職



アンリ・ポアンカレ研究所(パリ)にて